



第4回 掛川考古展

# 古墳時代

と き 平成20年11月12日(水)～16日(日)

ところ 掛川市立中央図書館1階生涯学習ホール

掛川市教育委員会

## 開発予定地内に遺跡はありませんか？ 工事の計画前に確認して下さい。

掛川市内には現在701遺跡が確認されていて、県内でいちばん遺跡が多い市だといわれています。遺跡（埋蔵文化財）は、私たちの“心のふるさと”であり、後世の人たちに伝えていく大切なものです。

そのため、「文化財保護法」により、遺跡がある場所で、土木工事や建築工事、茶園の改植などを行う場合には、事前に文化庁へ届け出をすることが義務づけられています。

届け出をしないで工事を始めたところ、遺跡が見つかったため調査をすることになり完成が遅れてしまった……ということがないように、工事を計画する場合には、早めに教育委員会にご相談ください。

なお、教育委員会、図書館には、市内にある遺跡の位置を記した「遺跡地図」があります。静岡県教育委員会文化課のホームページでも遺跡地図は公開されています。工事を計画する前には必ず確認してください。

掛川市教育委員会 生涯教育課 文化財係  
電話 (0537) 21-1158



### 文化財愛護シンボルマーク

文化財愛護シンボルマークは、文化財愛護運動を全国に推し進めるための旗じるしとして、昭和41年（1966）5月に定められたものです。

このシンボルマークは、ひろげた両方の手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗椀（ときょう＝組みもの）のイメージを表し、これを三つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承してゆくという愛護精神を象徴したものです。

## 古墳時代

3世紀の半ばから7世紀末までの、九州から東北地方にかけて古墳が造られた約450年間を古墳時代と呼んでいます。

古墳時代に先立つ縄文時代と弥生時代は、それぞれの時代に使用された土器から時代名が付けられました。これに対し、古墳時代は、この時期を特徴づける古墳から、時代名が付けられました。

古墳時代の初期には、縄文土器、弥生土器の系譜を引く赤褐色の土器が使用されました。5世紀になると、朝鮮半島からロクロによる成形と窯による焼成方法が伝えられ、灰色をした硬い土器をつくることができるようになりました。私たちは、赤褐色の土器を土師器、灰色の土器を須恵器と呼んで区別しています。5世紀以降は、用途により硬さはないが耐熱性にすぐれた土師器と、硬く液体貯蔵向きの須恵器の2種類の焼き物が併用されました。

古墳時代約450年の間に、古墳の規模や構造などが変化しています。そこで、古墳時代を、前期、中期、後期、終末期に分けています。

それでは、それぞれの時期について、市内の遺跡の様子を紹介します。



土師器



須恵器

## 前期

豪族の墓である前方後円墳が畿内を中心に瀬戸内海沿岸、北部九州で造られ、各地に広まっていった3世紀半ばから4世紀全般を指します。

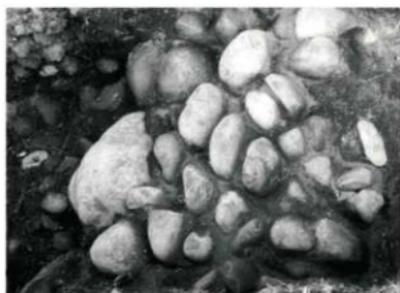
市内では、前期の初め頃は、まだ古墳が造られることはなく弥生時代以来の墓である方形周溝墓が造られました。この方形周溝墓とは、遺体を埋葬する墓穴の周囲に四角く溝を巡らせた墓です。

女高I遺跡（高田）から発見された方形周溝墓は、一辺約8mの四角形で、大きさは弥生時代のものとは比べても大きいとはいえません。しかし、次の2点は、弥生時代のものと

異なります。まず、弥生時代のものとは比較にならないほど多量の土器が死者に供えられていました。次に、弥生時代の方形周溝墓は密集しますが、ここでは1基だけでした。この2点の特徴は六ノ坪遺跡（秋葉路）から発見された前期の方形周溝墓にも当てはまることです。これは弥生時代の方形周溝墓が、集落の人々の墓であるのに対し、古墳に埋葬された豪族のような権力者が誕生しつつあったことを物語っているのかもしれませんが。

市内で前方後円墳が造られるようになるのは前期の終わり頃のことです。

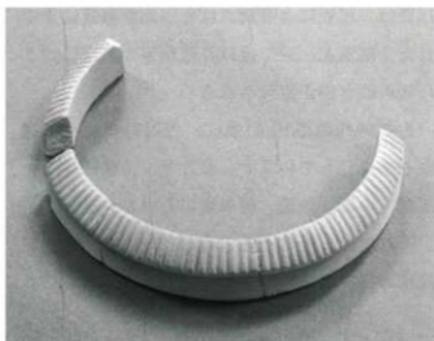
前坪古墳群3号墳（高御所）は、尾根上につくられた全長47m、後円部の直径29.5



前坪古墳3号墳葺石

m、高さ5.2m、前方部の長さ17.5m、幅は推定で25mの規模があります。墳丘の斜面には崩落を阻止し、見映えをよくするための葺石が施され、前方部の中ほどの高さから幅60cmの段が確認されました。段や裾からは壺の破片が出土していて、古墳に壺が立て並べられていたと推定されます。後円部の東側には、尾根を切断する幅3mの溝があり、自然の地形と古墳を区切っています。

谷田古墳（下土方）は、確認調査で発見された古墳で、部分的な調査のため規模や概要などは不明です。主体部は、竹を縦に割った形に似ている割竹



谷田古墳出土石劔

形木棺で、棺の下に砂利と拳大の河原石を敷きつめていました。砂利の上から赤い顔料が発見され、腕輪の形をした「石劔」と呼ばれる石製品が発見されました。石劔の発見は、市内で唯一です。

市内のこの時期の集落は、和田岡地区の丘陵上から比較的大きな集落が発見されています。和田岡地区の丘陵からは、弥生時代後期からこの時期まで続く集落が発見されています。集落は、堅穴住居と掘立柱建物で構成されています。堅穴住居の形に変化がみられ、弥生時代後期までは円形が主流でしたが、古墳時代になると隅が円い方形の堅穴住居に変化します。住居の構造や使い方などの変化があったためと考えられます。

## 中期

大仙陵古墳（大阪府堺市）に代表される巨大な前方後円墳が日本各地に次々と造られた5世紀代を中期と呼んでいます。

市内のこの時期の古墳は、国史跡に指定されている和田岡古墳群があげられます。和田岡古墳群は、前方後円墳である各和金塚古墳（各和）、瓢塚古墳（高田）、吉岡大塚古墳（吉岡・高田）、行人塚古墳（吉岡）、円墳の春林院古墳（吉岡）から成ります。

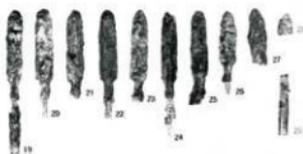
このうち、吉岡大塚古墳は、整備に向けた資料を得るための発掘調査が平成19年度から行われています。この古墳は、全長55m、後円部の直径41.3m、高さ7.2m、前方部の幅27.5mを測り、上から見た形が帆立貝に似ていることから帆立貝形古墳と呼ばれる珍しい形の古墳です。古墳の周囲には、幅7mの溝が巡らされています。墳丘の中ほどに幅約1.2mの段があることがわかりました。段の少し下までは自然の地形を利用し、そこから上は盛り土で成形されていました。段の縁には直径15cmの円筒埴輪が据えられていたことから、段の縁に一定間隔で埴輪が並べられていたと考えられます。墳丘の斜面には、葺石があることがわかりました。

浅間神社古墳群3号墳（長谷・高御所）は、尾根上につくられた直径40m、高さ7.3mの市内最大の円墳です。古墳の頂上と裾から、円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪が見つっています。主体部は、幅2.5m、長さ9.1mの大きさで、中から鉄製の剣1、鎌28、刀子3、斧6、鋸1、錐1、つり針3、ヤス（魚を刺して捕まえる道具）1など様々な鉄製品が発見されましたが、装身具類は何も発見されませんでした。

五塚山古墳（大坂）は、尾根上に造られた直径約22mの円墳です。古墳は、自然地形を利用して、部分的に盛土をして造られています。



吉岡大塚古墳 葺石埴輪出土状況



浅間神社古墳3号墳出土鉄製品

古墳には主体部が3つあり、第一主体部は棺のまわりを河原石で覆った「礫塚」と呼ばれる構造で、市内では他に例がありません。ここから出土した遺物も、「有蓋台付四連環」、「台付三連懸」という特異な形の須恵器や、鏡、垂飾付耳環の一部と思われる金製の金具、鉄製の剣と矛などが発見されました。調査では、棺に使われたと思われる板状の木製品が出土し、分析の結果、コウヤマキであることがわかりました。

和岡岡古墳群・浅間神社古墳群3号墳・五塚山古墳は、古墳の規模が大きく、死者に供えられた物も豪華であることから豪族の墓と考えられます。

この時期の末頃になると、規模が小さく、副葬品も貧弱な古墳が密集して造られるようになります。

不動ヶ谷古墳群（上屋敷・和光）は、狭い尾根上に5世紀末から6世紀前半にかけて密集して造られた7基の古墳が調査されました。古墳の規模は、直径5～12mを測り、主体部の中からは、鉄製の斧・鎌、装身具の管玉などが発見されました。

本村古墳群（高御所）は、東名高速道路建設に伴い6世紀前半と考えられる2基の古墳が調査されました。古墳の規模は、直径8～11mで、主体部からは、鉄剣、鉄鎌、刀子などが発見されました。

このような古墳群は、群集墳と呼ばれ、その出現の背景には、次の2説が考えられています。①それまで豪族しか造ることができなかった古墳を、より身分・地位の低い人々も造ることができるように許可されたため、②鉄製の工具・農具の普及により、農作物の収穫が増加して生活が豊かになったため、古墳を造ることができる人々が増加したため。

今坂遺跡（吉岡）からは、長さ4.7m、幅2.4m、深さ0.9mの規模の、古墳の主体部と比較しても色のない墓が発見されました。墓内からは、副葬品の鉄剣が出土しました。この墓の周囲からは、古墳を想定させるものが発見されていないことから、古墳ではないと考えられます。

この時期の住居跡は、六ノ坪遺跡（秋葉路）・高田遺跡（高田・吉岡）などから発見されています。六ノ坪遺跡からは、古墳時代中期の竪穴住居跡が2軒、中期から後期の竪穴住居跡が10軒発見されました。

祭りの跡と考えられるものも発見されています。

原川遺跡（徳泉）は平野に立地する遺跡で、溝の中から土器に混じって軟らかい石で作られた粗雑な勾玉・白玉が多数発見されました。これらの玉は、実用ではなく祭りに用いられています。

丘陵にある女高Ⅰ遺跡（高田）では、前期に造られた方形周溝墓の溝から 中期の土器（壺・高坏等）・砥石・剣の形を石で模造したもの・ガラス玉などが発見されました。溝が

埋没していく過程で祭りが行われたものと考えられます。

丘陵から見下ろす原遺跡（和光）からは、溝の中から高坏を主体とする夥しい量の土師器が発見されました。自然の流路に接続していることから、水辺の祭りの痕跡と考えられます。

天土森・古桶遺跡（西大洲）は、昭和17年の社殿工事の時に子持勾玉と呼ばれる長さ9.5cmの特殊な勾玉が発見されました。子持勾玉は、大きな勾玉の周囲に小型の勾玉を付けた形をしています。古代、この場所は入江に面していたと考えられますから、海にかかわる祭りが行われた可能性があります。

これらの事例から当時は様々な場所で、様々な時に祭りが行われていたと考えることができます。

## 後 期

中期の末から出現する群集墳が盛んになる6世紀代を、後期と呼んでいます。後期の中ごろから、市内の古墳の様相は大きく変化します。

それまで、古墳の主体部は、墓穴を上から掘り、そこに遺体を埋葬する竪穴式でしたが、この時期以降横穴式の主体部が主流となります。



平塚古墳横穴式石室

同じ横穴式ですが、市内には2種類の施設がみられます。ひとつは、横穴式石室と呼ばれるものです。この横穴式石室は、遺体を安置するための部屋である玄室と、その玄室に入るための通路である羨道を石囲いで造るものです。もうひとつは横穴墓と呼ばれる、山の斜面に横穴を掘って、玄室と羨道を造るものです。

横穴式石室は、本郷から家代、上西郷方面に見られ、横穴墓は市内のほぼ全域に分布しています。

平塚古墳（上西郷）は、直径30m、高さ5mの円墳と言われてきましたが、一辺20～25mの方墳の可能性もあります。石室は、玄室長5.3m、幅1.8m、羨道長8.2m、幅0.8mの規模です。昭和31年の調査により、石室内から、大刀、刀子、須恵器（坏・高坏・提瓶・壺等）、耳環、玉類（勾玉・管玉・切子玉・ガラス玉）などが発見されました。

市役所周辺には、山麓山横穴墓（下俣）・宇洞ヶ谷横穴墓（下俣）・堀ノ内横穴群D・1

号墓（長谷）などの横穴墓、横穴式粘土室と呼ばれる主体部を持つ堀ノ内古墳群13号墳などが造られました。これらの横穴墓・粘土室墳からは、鏡、金銅で美しく飾られた大刀・馬具などが発見されています。

玉体横穴群（中方）は9基が調査され、このうち第3号横穴からは、多数の須恵器・土師器の土器のほかに、鏡1面、太刀2振、帯に使用されたとと思われる金具3点などが発見されています。

平塚古墳、市役所周辺の横穴墓と横穴式粘土室、玉体横穴群などは、規模と遺物から、豪族の墓と考えられます。

後期になると、竪穴住居の構造に大きな変化がありました。中期までは、煮炊きをしたり暖を取ったりするための炬がありましたが、後期になると住居の一边にカマドが造られるようになります。カマドは、燃料を焚く場所を粘土で覆って熱効率を良くして煙道で煙を屋外に排出する構造で、煮炊き専用です。

丘陵部の六ノ坪遺跡（秋葉路）と原遺跡（和光）で、カマドをもった竪穴住居跡が発見されています。また、平野につくられた集落である曾我後遺跡（岡津）からは、ボーリング場建設に伴い、後期から終末期の竪穴住居跡12軒が調査されました。住居跡は、四角形を呈し、北側の壁の中央付近にカマドが造られていました。住居内からは、環・高環・壺・甕などの土器が発見されています。



曾我後遺跡第7号住居跡

## 終末期

およそ7世紀代を、終末期と呼んでいます。

この時期、市内では後期同様、横穴式石室と横穴墓が造られました。

居村古墳群（平野）は、小笠山総合運動公園建設に伴い横穴式石室の古墳3基が調査されました。古墳は7世紀中ごろに造られ、石室内から須恵器・土師器、大刀、耳環などが発見されました。

愛宕山横穴群（横須賀）は、横須賀の街並みの北側丘陵に所在する4基からなる横穴群で、昭和35年に2基、昭和44年に2基が県立横須賀高等学校の工事に伴い調査されました。横穴からは、須恵器、鎌、耳環などが発見されました。須恵器の中には、全国的にも珍し

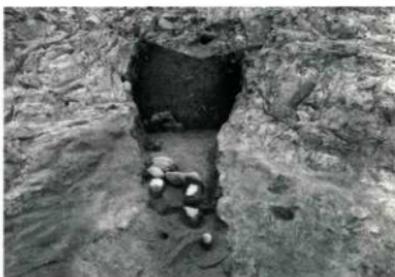
い三つの脚が付いた壺がありました。これらの横穴群は、6世紀末から7世紀前半にかけて造られたと考えられます。

新田横穴群（高御所）では、7世紀中ごろの横穴群に隣接してカマドをもった竪穴住居跡が発見されました。横穴墓と竪穴住居跡が近接して発見されることは非常に珍しく、竪穴住居は横穴墓の造営にかかわった人々の住まいであった可能性があります。

この時期から、山崎から西大湖にかけての丘陵地には、窯が造られようになります。釜ヶ谷古窯跡群（西大湖）は、谷間に所在する古墳時代から平安時代の窯跡群です。窯跡群の中央に位置するC-1号窯からは、須恵器環、高環、こね鉢、提瓶などが出土しました。



釜ヶ谷古窯跡C-13窯



寺ヶ谷横穴

市内八坂の八坂別所遺跡と頭地遺跡からは、7世紀前半から8世紀末までの遺構と遺物が確認されています。この八坂別所遺跡と頭地遺跡の8世紀代の性格は、佐夜の中山峠という東海道の難所を控えた場所に設置された公的な施設と考えられます。

寺ヶ谷横穴（下俣）は、7世紀末に造られたと考えられる横穴墓です。後期から終末期の横穴墓は、密集して造られますが、この横穴墓は単独1基で存在するだけでなく、玄室と羨道という横穴の体裁を失った墓跡です。

7世紀前半に突然出現する八坂別所遺跡と頭地遺跡、横穴の体裁を失った寺ヶ谷横穴墓などは、時代の変革を表しているのかもしれませんが。

参考図書 〔掛川市史 上巻〕掛川市 1997  
〔日本歴史館〕小学館 1993  
〔日本の歴史〕講談社 2001  
〔日本の時代史〕吉川弘文館 2002

# 年 表

年代	時代	主なできごと
200 3世紀	弥生時代	200 邪馬台国で卑弥呼女王となり、大乱を治める。(『魏志倭人伝』)
		239 卑弥呼が魏に朝貢し「親魏倭王」の号を受ける。(『魏志』)
		248 卑弥呼死す。倭国は乱れ巷与女王となり国を治める。(『魏志』)
300 4世紀	前期	近畿地方で前方後円墳がつくられる。
		350頃 百済・新羅が建国される。
400 5世紀	古墳中期	391 倭、百済・新羅と戦う。
		404 倭、帯方郡に侵入し、高句麗に撃退される。
500 6世紀	古墳後期	仏教伝来
		587 蘇我馬子、物部守屋を滅ぼす。
600 7世紀	終末期	593 聖徳太子 推古天皇の摂政になる。
		607 法隆寺建立
700 8世紀	奈良時代	645 大化の改新
		694 藤原京に都を移す。
		701 大宝律令を定める。
		710 平城京に都を移す。